
ワインディング

Taki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワインディング

【Nコード】

N8986C

【作者名】

Taki

【あらすじ】

歪んだ世界に迷い込んだとき、人間は何を思っただろう。その歪みを受け入れるのか、抵抗するのか、あるいは歪みきった世界に気づくこともないのか…「短編連作で綴る8つの歪んだ物語」

序章

我々が生きていく中で『歪み』というものは常につきまとうものだ。

まばたきを一回しただけで、そこは全く別の世界へと変貌するといふことを我々は認識しておかなければならない。

世界とは常に移り変わり、変化を止めることはない。

そのスピードはあまりに不確定で、時よりそれについていけないこともたびたびある。

しかし、我々は慣れ、あるいは情報や技術を手に入れることで対応してきた。

恐ろしいまでに人間は環境に適應する能力を持っている。

私や、あるいはこれを読んでいる君が生まれる以前から、そしていなくなつた後もだ。

では、人間は全ての変化に対応できるのか、あるいは人間が対応できないほどの『歪み』はありうるのか。

結論からいえば、そのような『歪み』もまた存在する。

しかし、それだけを見ても君は理解できないかもしれない。

どこが歪んでいて、どこが歪んでいないのか

誰が正しくて、誰が間違っているのか

何が喜劇で、何が悲劇なのか

完全な『歪み』の世界とは

それが誰もわからなくなってしまった世界のことなのだから。

T a d d y B r i a n

『歪曲論』 - 本文抜粋 -

序章（後書き）

かつて超短編として書いたものに手を加えた作品です。

第一章 炎のHERO

ある日目覚めると、俺は炎が怖くなっていた。

いつもと変わらない目覚め、なんてことはないいつもの朝だった。

初秋の少しひんやりとした空気が布団から出ようとする俺の体に突き刺さる。

若い若いと思ってるうちにもう31歳。家庭を持って子宝にも恵まれたが、突然の隣県への転勤。

説得はしたものの受け入れてもらえず、身重の妻を実家に預け、俺は単身赴任の生活を送ることになった。

「寒くなつたな。」

隣県にもかかわらずこちらの秋冬は訪れが早く、持ってきた装備には限界がきていた。今度帰ったときに冬物を持ってこなければ。

こんな朝は熱い味噌汁に限る。とはいってもそこは単身赴任、所詮インスタントしかないんだが…無いよりはマシだろう。

いつものようにヤカンに水をいれコンロのつまみをひねる。

チチチチッ…ボツ

順調に火がとまり、そして

……………カチッ

俺はコンロを止めた。

「え…？」

自分の意思ではないようだった。手が勝手に動いたのだ。…いや、手が動く一瞬前に感じた寒気。

あれは疑いような無い、明確な恐怖だった。

結局俺はコンロに火をつけることができないまま会社へむかった。

初めての感覚。火への異常なまでの恐怖。

逃げ出すことはできない。目の前の炎を消さなくてはいけないという使命にも似ていた。

「どうだ？一服しないか？」

昼休みに同僚の近藤に言われたが断った。自慢じゃないが同僚内じや俺が一番のヘヴィスモーカーだったから近藤には驚かれた。

「禁煙か？やめとけて、お前には無理無理。」

別に止めたくて断ったわけじゃないが、ライターが怖いなんて言うはずもなく。その場はうまく言い逃れをした。

「いつまで続くか見ものだぜ」けけけと笑って近藤は喫煙室へむかった。

その日の仕事には手が付かなかった。ニコチンを求める気持ちと火への恐怖がせめぎあってそれどころではなかったのだ。

そわそわしたまま17時きっかりに仕事をたたみ車に飛び乗り帰路につく。

街中を走っているとやけに交通人が同じ方向に走っていくのが気になった。

不審に思いその方向を見ると空に黒煙が立ち昇っている、火事だと本能で気づくより先に俺はハンドルを黒煙に向けてきっていた。

火事現場は人だかりで埋め尽くされていた。

「消防車はまだか！！！」

「邪魔だ！！邪魔！」

炎の音と周りの喧騒であたりは騒然としている。

見ると民家の2階をオレンジ色の炎が包み、今にも飲み込もうとしている。

ぞくり…

その時、冷たい手で背中を触られるような寒気が俺を襲う。

同時に心拍数が早くなっていき興奮を抑えきれなくなっていた。

今日火を前にして何度も感じた感覚だがこれほどまでに大きな反応は初めてだった。

そして呼吸が乱れ始め、手のひらに汗をかき出したころ、俺はこの恐怖の正体に気づいた。

これは恐怖ではなかった。

抑えきれない興奮と衝動…目の前の炎をどうしても消したいという気持ちに他ならなかった。

次の瞬間俺は走り出していた。

一気に人ごみを抜け、玄関から民家に飛び込んだ。

一瞬背後から何かを言われたような気がするけど気にしない。恐ろしいまでに本能に忠実だった。

無事な1階を駆け抜けて2階へ駆け上がる。一番置くの部屋を開けると、黒煙に視界を奪われる。

何とか薄目をあけるとそこはカーペットやカーテンが燃え上がる子供部屋だった。

上着を脱ぎカーペットの炎をばたばたと叩いた。もちろんその程度で消える火ではない、でもやめることができなかった。

次第に意識が朦朧としだして、膝からぐんと崩れ落ちる。

ムニユ…

その時、床に着くはずの手が何か柔らかいものに触れた。見ると子供が倒れていた。

俺の記憶はここで途切れている、この後の映像はもやがかかったみたいに曖昧で正直何がなんだかわからない。

後から聞いた話だが俺はこの子供を救出して玄関からでた直後倒れたらしい。

それから数週間は大変だった。

病院のベッドで目覚めると俺は子供を救い出したヒーローになっていた。

その子が感謝しにやってくるくらいなら別に構わなかったが、地方

紙の取材を受けたり、消防署の偉い方から賞状をもらったりした。

すぐに退院したものの、俺は家にこもり続けた。

俺の心は興奮状態を保っていた。

火を消すあの快感を忘れることができず、コンロの前に座り付けては消し、付けては消すという毎日を過ごした。

チチチッ…ボツ…カチッ

チチチッ…ボツ…カチッ

駄目だ。この程度の火では何も満たされない。

ブブブ…ブブブ… 携帯のバイブレーションが鳴る。 見ると妻だった。

チチチッ…ボツ…カチッ

チチチッ…ピッ「はい？」

『あなた…いろいろ大変でしょう？もうちょっと休みをとって帰ってきたらどうかしら？』

ボツ…カチッ「ああ…そのうち帰るよ」

チチチッ…ボツ「それとね、あなたお腹の子が…」ピッ……………力

チッ

火が欲しい。火を消したい。

何も耳に入らない…何もする気が起きない。火を消したい…それ以外は

翌日、臨時ニュースが放送されていた。

この国にミサイルが着弾したそうだ。

着弾したのは隣県の都市、俺の故郷だった。

町は壊滅…生存者のいる可能性は絶望的らしい。

あそこには両親がいる。妻がいる。子供がいる。

それなのに俺の心は嬉々として興奮していた。

悲しさは不思議となかった。

なぜかって？

臨時ニュースの映像を見ろよ。

あんなに燃えた町を見たことがあるか？

火だ…あそこには火がある。

第二章 朝って何？

「ねえパパ…朝って何？この本に書いてあるんだ。」

歳は7つか8つくらいだろうか。淡いブロonzの髪をした少年が、夕食を終え暖炉の前でうとうとしていた父親に尋ねた。

「あ…さ」？…んん？パパにはわからないな。明日図書館にでも行って調べてみたらどうだ？」

父親は息子の持つている分厚い本を見て答えた。

少年は父親に聞けば解決すると思っていたのだろっ、少し残念そうな顔をして

「そっか…そうしてみるよ。」と答えた。

「行ってきます。」翌日少年は朝一で家を飛び出した。

目的地はこの町で一番大きな図書館、読書が何よりも大好きな少年の一番好きな場所でもあった。

「あ…さ。…あ、あ…さ…。駄目だ。“麻”とかしかでないや。」

図書館に駆け込んだ少年が真っ先に向かったのは辞典と事典のコーナー

小さな両腕に抱えられるだけの本を抱えて、少年は目的の言葉を探す。しかし、少年が望むような答えは見つけることができなかった。

「すみません。朝って何かを調べたいんですけど？」

少年は図書館にいる役員の人に相談することにした。

対応してくれたのは初老の女性。「研究熱心な子だこと。」と云ってくすくす笑いながら手元のキーボードを叩いた。

「あら？その言葉に関する本はうちの図書館には無いみたいね。麻”じゃないわよね。ごめんなさいね、ぼうや。」

そんなことは滅多に無いのだろう、初老の女性は驚いた顔をして申し訳なさそうに少年に言った。

町で一番の図書館に無いということは、どこにも無いということだ。少年は図書館に行けば解決すると思ったのだろう、少し残念そうな顔をして

「そうですか…ありがとうございます。」と頭を下げた。

夜、少年はその日あったことを暖炉の前の父親に伝えた。

「…それでね、あの図書館に朝に関する本はなかったんだ。だから調べられなかったよ。どうしようパパ」

父親は残念だったねと少年の頭を撫でながら言った。

「本に書かれてないからって諦めることはないぞ。そういう時は人に聞くのが一番なんだ。」

「人に？」

「そうだ。わからないものほど意外な人が知ってたりするからね。まずは学校の友達とか先生に聞いてごらん。」

「もしそれでも分からなかったらどうするの？」

「次は町だ。知ってる人、知らない人誰だっていい。いろんな人から聞いてごらん。」

父親のアドバイスに視界が突然広くなった少年はうれしそうにお礼を言った。

翌日、学校へ行った少年は隣の席の女の子に尋ねた。

「ねえ…朝ってなにか知らない？」

女の子は少し悩んでから首を横に振った。

「わからないよ。どうして？」

「本に書いてあったんだ。でも何なのかが全然分からなくて…」

少年が残念そうにしていると「図書館では調べてみた？」と女の子が聞いてきたので昨日の事を教えてあげた。

同じようにクラスで一番力持ちのガキ大将のところへ行って少年は尋ねてみた。

「ねえ…朝って何か知らない？」

ガキ大将はもとも少年のことが嫌いでぶっきらぼうに言い放った。
「知らねえよ。こつち来んな！！…大体クラスで一番頭がいいお前が知らないこと知ってるわけ無いだろ。」

そういつてガキ大将は仲間を何人か引き連れて行ってしまった。

今度はお金持ちのお坊ちやまのところへ行って少年は尋ねた。

お坊ちやまは少年の知らないいろんな物を見せてくれる友達だった。

「ねえ…朝って何か知らない？もし持ってたから見せて欲しいな。」

お坊ちやまは首を傾げて少し悩んだ後

「いや…僕もそれは持ってないな。初めて聞いたよ。今度探してみ

るね。」

「そっか…うん、よろしくね。」

「どうしても知りたいなら先生に聞けばどうかな？」

お坊ちゃまのアドバイスで少年は職員室に向かった。

担任の先生は日誌を書いているようだった。

「先生…朝って何か知ってますか？本に書いてあったんです。」

担任の先生は手持ちの辞書などを持ち出して探し始めた。

しかし見つけられず、周りの先生にも聞いたが誰ひとりとして知らなかった。

「ごめんなさい…ちょっと分からないわね。図書館にも無かったんですよ。本当に専門的な言葉なのかも知れないわね。」

少年は学校に行けば解決すると思ったのだろう、少し残念そうな顔をして

「そうですか…ありがとうございました。」とお礼を言った。

その帰り道、少年は知ってる限りの知り合いを尋ねることにした。

まずは酒屋のおじさん、陽気な人だ。

「ねえ…朝って何？」

「なんだそりゃ？新しい食い物か？がっはははは！！」

次に床屋のおばさん、いつも丁寧に切ってくれる。

「ねえ…朝って何？」

「知らないわねえ…何かの部品かしら」

物知りのトミーじいさん。前にも色々教えてもらった。

「ねえ…朝って何？」

「朝？…分からないのお…新しいものじゃないのかい？」

町にいる知らない人にも聞いてみた。

高校生のおねえさん。めがねをかけていた。

「ねえ…朝って何？」

「ごめんね。んん、学校では習わないなあ」

怖そうなおにいさん。髪がギラギラしていた。

「ねえ…朝って何？」

「なんだおめえ…知らねえよ、そんなもん。」

金髪のお姉さん。ちょっとHな服をきていた。

「ねえ…朝って何？」

「わからないわ…ごめんなさい」

「ねえ…朝って何？」

「君…朝を知りたいのかい？」

そう言ってきたのは黒髪の青年だった。

「知ってるの？」

「ああ…」

「お願いします。教えてください。」

「礼儀正しい子だな。いいだろう。」

青年は微笑んでしゃべり始めた。

「朝って言うものは常に僕ら人間のそばにあったものだったんだ。でも…いやだからこそ、人間はそのありがたみに気づかなかったんだね。」

ある時人間は戦争をしたんだ、核を使ってね。…え？…核…ん…とても大きくて強力な火のことさ。

でもね、その核でまきあげられた砂やチリや埃が、人間から朝を奪ってしまった。人間は今まで住んでいたところでは生きていけなくなり穴を掘ったんだ。

そしてその穴に町をつくり、法をつくり、道德をつくり、価値観をつくり、やがてそこには国が生まれたんだ。

それが僕らのご先祖様のお話。だから朝はずっと昔に死んでしまったんだよ。…ははは難しい話だったかな。ごめんごめん。」

少年は少し難しい顔をしていたが、ひとつの答えに行き着き満足したのだろう。

笑顔を作り、青年に会釈して言った。

「ちょっと分からなかったけど、ありがとございました。朝ってとても大切なモノだったんですね。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8986c/>

ワインディング

2010年10月20日17時49分発行